

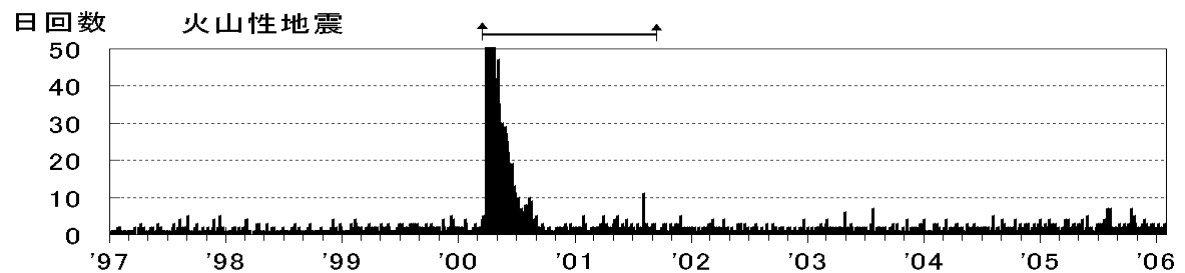
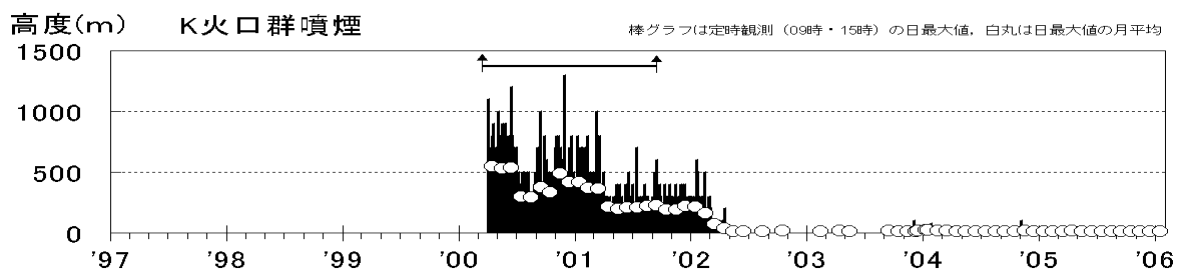
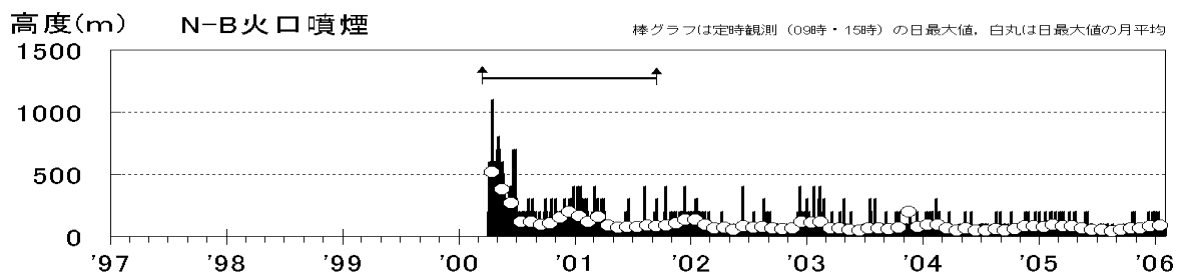
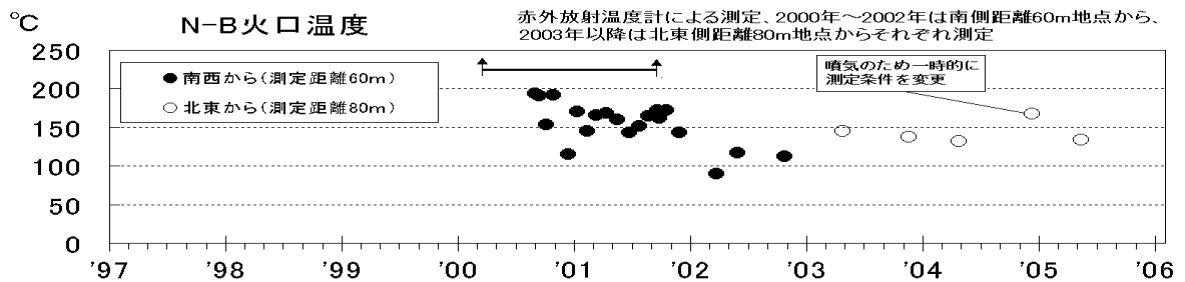
有珠山

1 概況

火山活動は静穏な状態が続いています。

2 噴煙の状況

西山西麓 (N) 火口群にある N-B 火口では、弱い噴気活動が続いており、噴気の高さは火口縁上おおむね 100m 以下で推移しました。金比羅山 (K) 火口群では、時折ごく弱い噴気が観測されました。その他、山頂火口原や昭和新山でも弱い噴気活動が続いていますが、これまでと比べて特に変わった様子は認められません。



最近の火山活動経過図 (1997 年 1 月 1 日～2006 年 1 月 31 日)

↑印で挟まれた期間は 2000 年噴火活動期

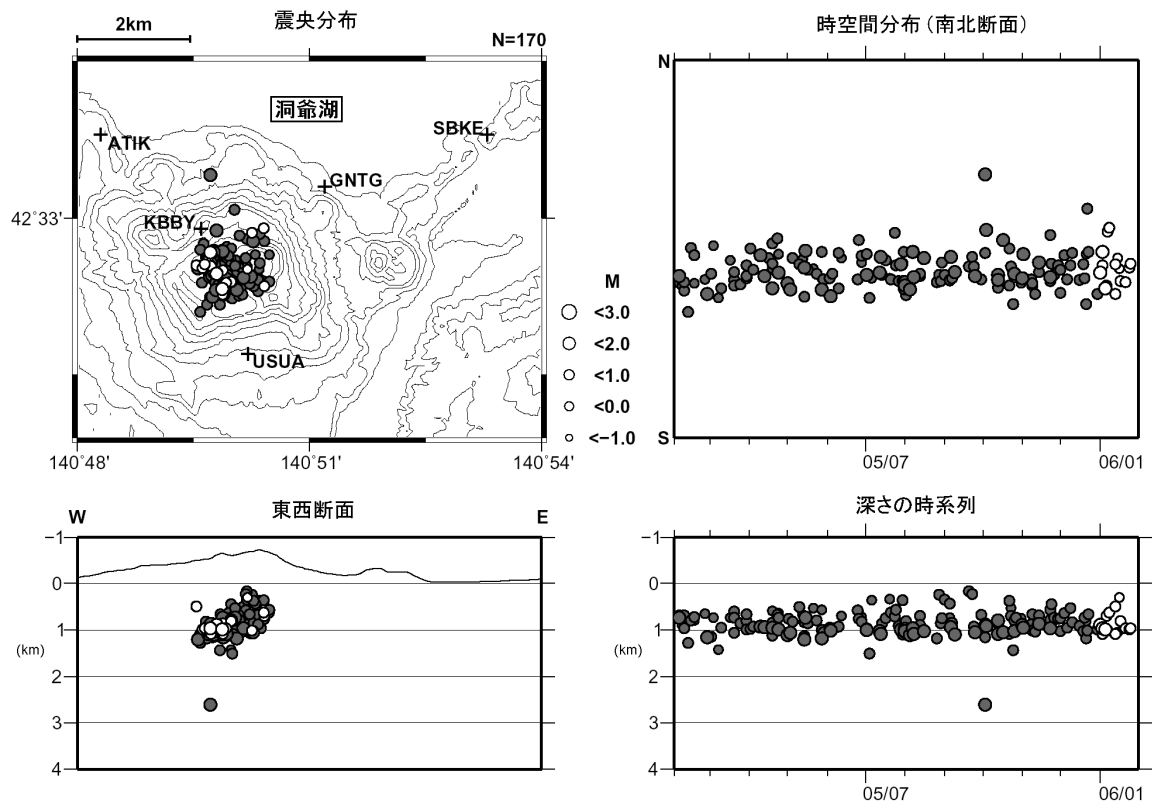
本資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50m メッシュ (標高)』を使用したものである。(承認番号 平 17 総使、第 503 号)

3 地震および微動の発生状況

火山性地震は 1 日あたり 0~3 回と少ない状態で経過しました。
火山性微動は観測されませんでした。

地震・微動の月回数 (A 点)

2005~2006 年	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月
地震回数	24	22	24	36	18	44	37	29	35	29	33	26
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



有珠山の震源分布図 (丸印：震源 +印：地震観測点)

○印は今期間 (2006 年 1 月 1 日~31 日) に求まった震源を示しています (16 個)。

●印は前期間までの 11 ヶ月間 (2005 年 2 月 1 日~2005 年 12 月 31 日) に求まった震源を示しています (154 個)。

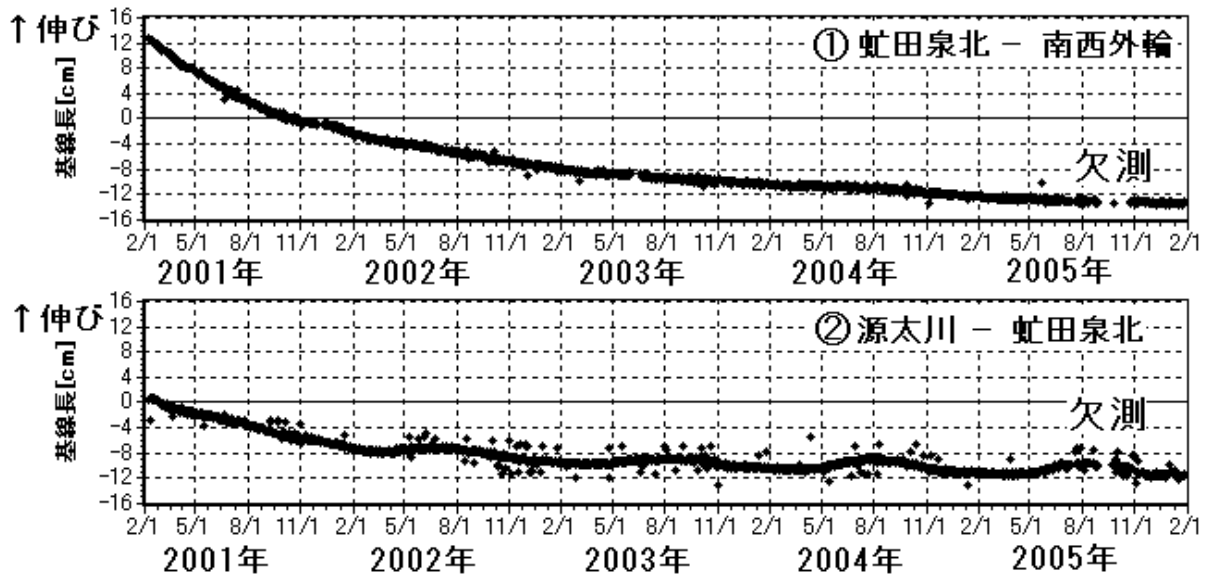
震源は山頂部直下の海面下 1km 前後に集中しており、今期間に求まった震源もこの領域内に分布しています。

震源分布図の説明

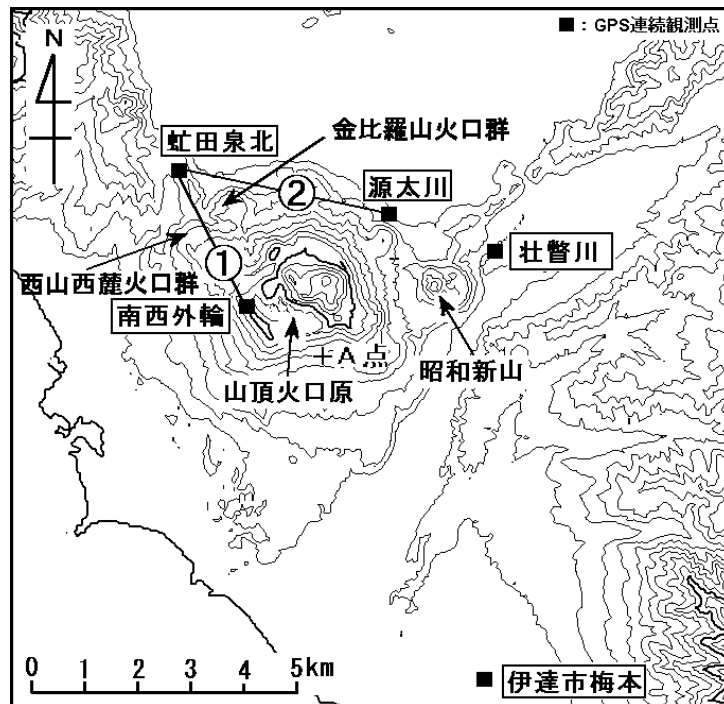
- ・東西断面：震央分布で表示された範囲を東西面に投影して、地震の垂直分布を示した図です。
- ・時空間分布：震央分布で表示された範囲を時間経過とともに南北面に投影することで、震央の位置がどのように推移しているかを示した図です。
- ・深さの時系列：時間経過とともに震源の深さがどのように推移しているかを示した図です。

4 地殻変動の状況

GPS 連続観測では、新たな火山活動の高まりを示すような変動は認められません。



基線長変化 (2001 年 2 月 9 日~2006 年 1 月 31 日)



5 上空からの観測結果

1 月 24 日に第一管区海上保安本部の協力を得て航空機による上空からの観測を実施しました。山頂火口原および金比羅山火口群の状況にこれまでと比べて特段の変化はありませんでした。赤外熱映像装置*による観測では、各火口の温度分布に変化は見られませんでした。

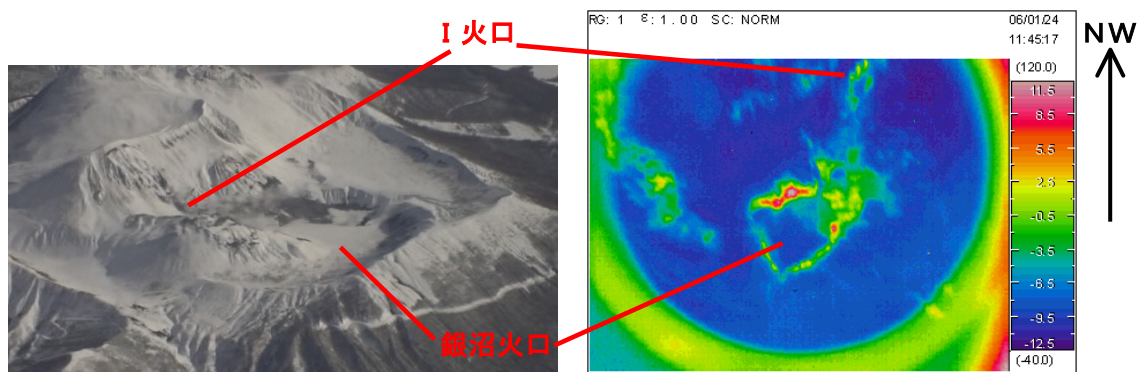
◎山頂火口原

I 火口、小有珠南東麓および銀沼火口壁の噴気孔や地熱域に対応する融雪域が認められ、白色の噴気が上昇直後に強い風のため南東に流れていました。これまでの状況と比較して、特に変化は認められませんでした。

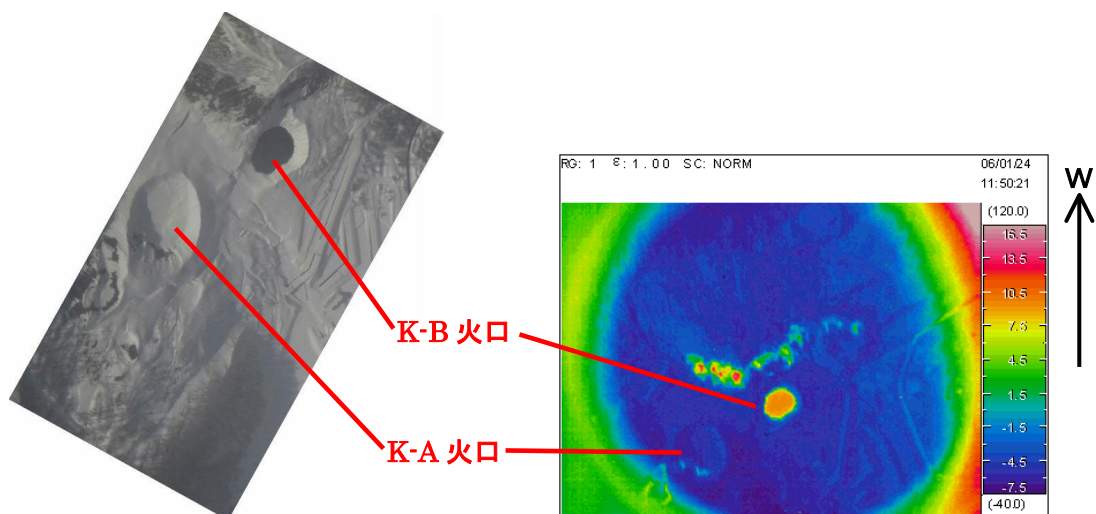
◎金比羅山火口群

K-A 火口内は雪に覆われた状態で、東壁の融雪域からはごく弱い白色の噴気が認められました。K-B 火口は湯溜りが続いていると推定されます。赤外熱映像装置*による観測では、K-A 火口東壁、K-B 火口の湯溜りおよびK-B 火口西側の地熱域に対応した熱分布が認められました。これまでの状況と比較して特に変化は認められませんでした。

*赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を検知して温度や温度分布を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できる利点がありますが、熱源から離れるほど測定される温度は実際の温度よりも低い値になってしまいます。また、噴煙や霧で測定対象が見えにくい場合には温度測定ができません。



西南西側上空から撮影した山頂火口原と約 1800m直上から北西方向を向いて撮影した火口原の表面温度分布 (周囲の円形の高温部はノイズ)



約 2200m直上から西方向を向いて撮影した K-A 火口および K-B 火口周辺の表面温度分布 (周囲の円形の高温部はノイズ)